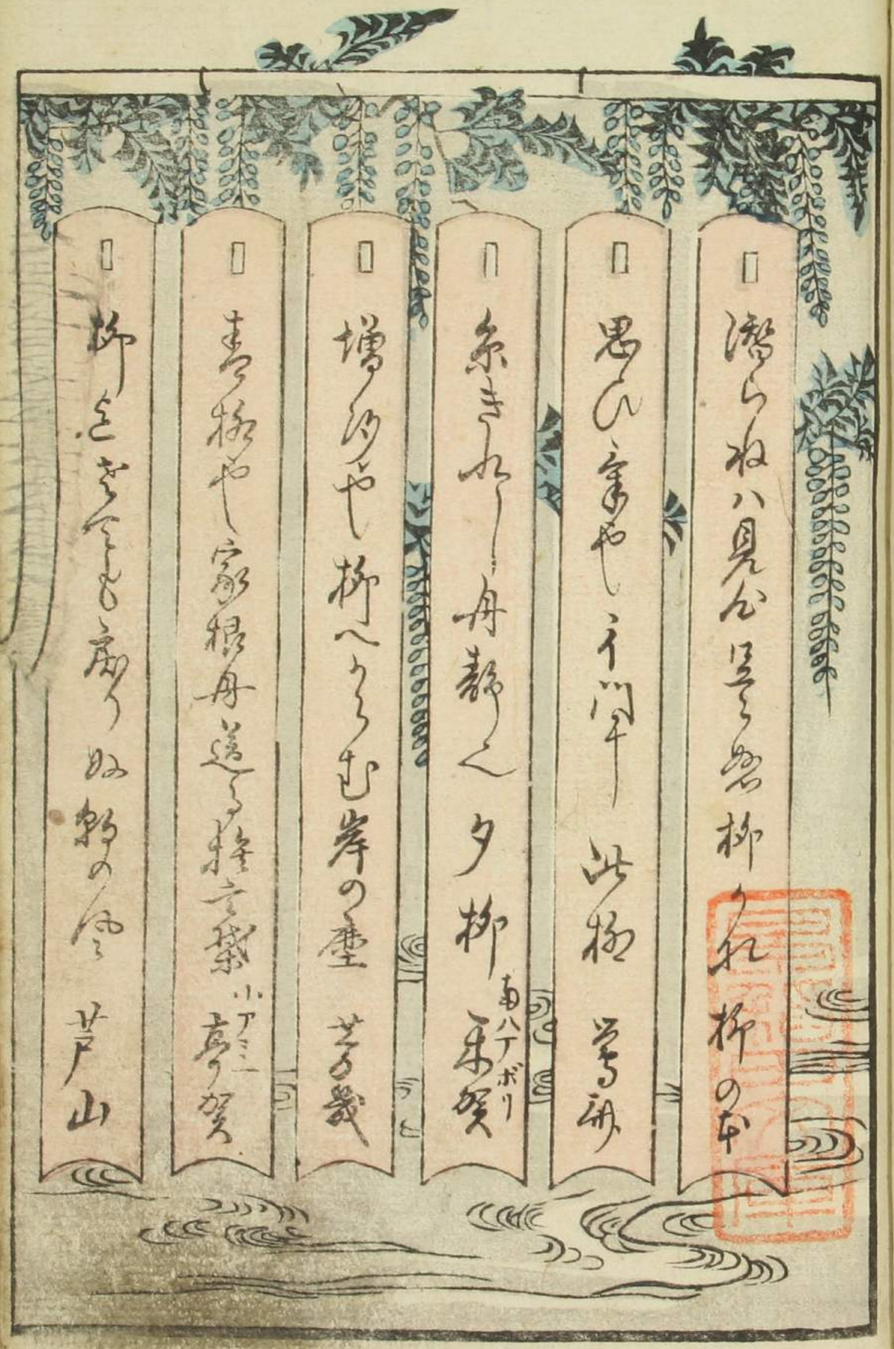
春雪風月帖

へ13
3014
2

へ13
3014
2

国

七十七号



□ 青柳や戰きやすい舟のめり　越州

□ 橋の上の柳　手見たる柳哉　小田原芦花

□ 夕涼の後ゆるき柳かな　せんな

□ 青柳や吹れこぼれや舟上り　一茶

□ 押分て見れハ柳の枝ぶり　[illegible]

□ 鍵掛し舟繋ぎ柳哉　金鶏

□ 月よ出て見よの柳の枝　玉慶

□ 風呂の新まくき弟子　[illegible]

□ 青柳や雪数見せる一ト宋　柳[illegible]

□ 糠雨我涙あて繋ぐ柳哉　芋仙

□ 酒の眼も覚て小雪し柳吹　文鶴

□ 青柳や流るゝ新ぬや水の月　春山

桟橋や
柳まつり
今の春
きんぞ丸摩

十九任 越前

春宵新話　風見草第二編巻之上

東都　梅亭金鵞編次

第七回

並木の松を後方にして南を望む一円海にして鶴の群れ遊ぶ雲助が仲間の屋を働く突て「コウ」と角内をつかむ美しいの夫婦と思ひ掃エヲ来たる「スムウ」法乗寺代者ど彼指の人数を引獲つて前へ出つ引ずり倒しやア又一ト元気出来る方アあの腕良あんで不入せ

ちんぢ〳〵悪不気を悪く者やアグるぜ。「何イ者不吹
て居るぞ形造の者へ外吹グらういやイ。ノウ婦エ左
様ぢやア私へ〻。「ヘンは者んぞを利うみて悪不徐〻
者ぢらうやアグ自己達者ア女を捕へて抱て森て
可老グる斗アさけまどゑ者の八慰んざと勿不者
女帝やへ持て行て御食不召るとと言のぢらうけ
者への天ぢらく己ざア。「己〻赤笛グ言様者夏之の人
ちんぢらう婦エが怖がつて彼方の方へ寄て通らア。

者つて通つて横うりのうライ婦エ左様ぢ〻と他
ちアア私へ裏不様男子の倉所グ立て居るの不。「ウ正エ
近所のりのぢア。「丹アやアア言ぢと知て居るグ年ぢ人ケ
私エ婦エぢ者アと己グ陸宗ある或言を吹ぬ人形
過体ハ十七八の乙女ぢて何やら包〻風呂敷と花の形
枝を成不様へ解かうる者ぢ紐を元ぢ丸ぢ後
様返り雲助が新の今元ぢ不得を者ぢ物と大ぢ不渇長物
足是利ある持金や者ぢ歩ぢ浪ぢ世ぢ与ア家

を出るとき艪を推す山吹人「君人度の人れを云ふ泳
ぎるの場所を云て殘せをお吉世人るより家出と知り
その事さを耐治ぎて父と母とが同者あり月ふ子人弟
グ後を追ひ出て安ることあるとて家を立のて行方くも
二夜さ三夜さの旅屋人此処らうへ来りあり「て怖
ろく彼者ふ人ちを見ると気味が悪うて体が球人で
歩行ふ者ふ者ふ故るけまとおく宮樹で弱ト話をえまと風
ちきて只袋包を花の枝をもちを所のの旅を一人平気ふ

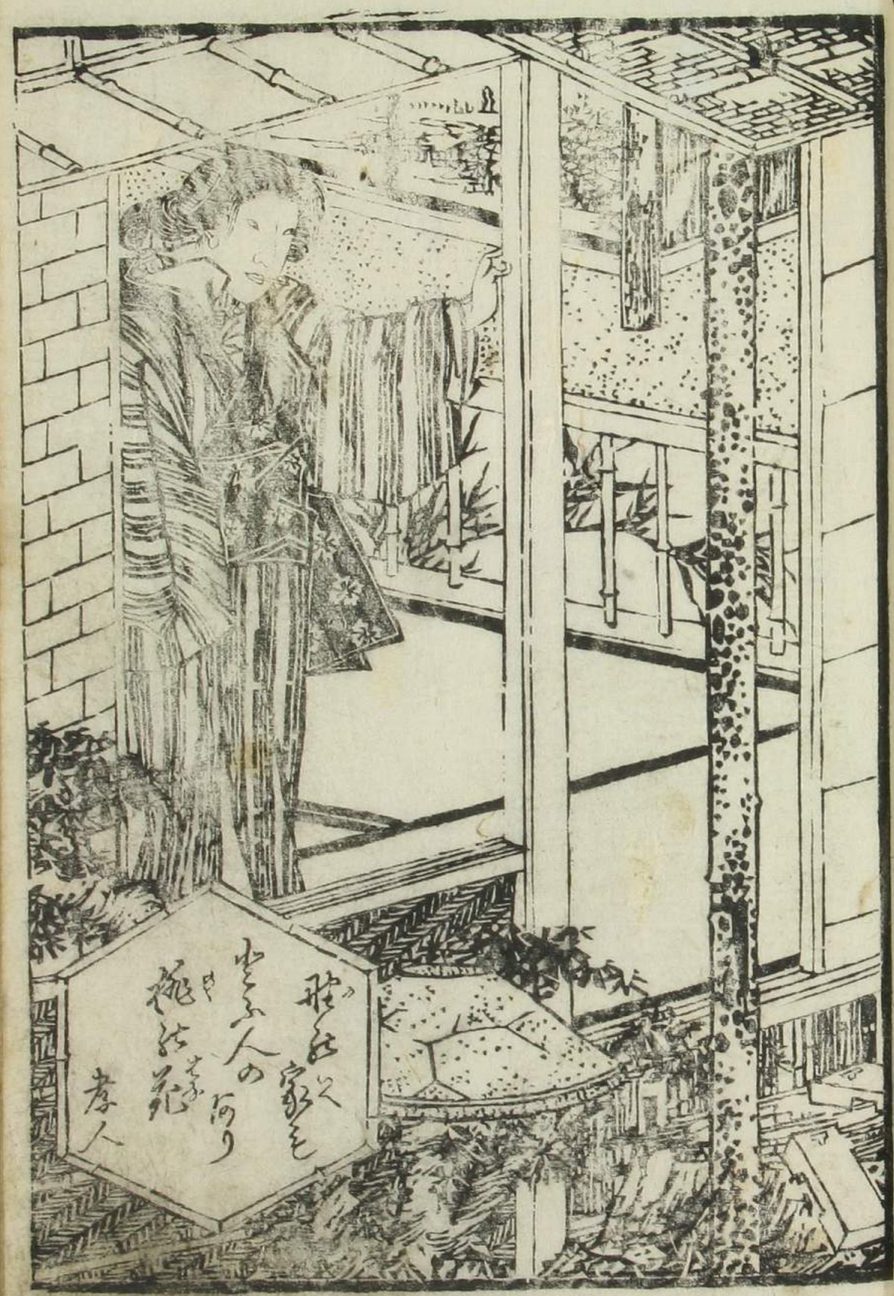
新ふハ人せて居るグ之の度ふ不気が痛こ命も編
人で居まふ君ひ丈でも僥倖と者屋ふ困ふ人初りの
一晩ぎりで後ハその家ふ子紙を貰ふて泊こ事何
者ふ彼者ふ此処まで人追ふの者ふも捕らぎふ
者こグ此者人板橋とふ先ふ花土ぎこの人ふ
ふ今の者ふ君姉者も居まふ子人弟さんが常平日
花土の磯井戸とふ不子供のこき家で使ふて可毛
ぐまふ男が れ無ふ捻木屋ふ成て居るふ何度で

あまべ方へ逃て他とかゝ云事を人の妻ゝ
て来る度へ来さけまど仏の卒塔婆の家ゝ知
よい雲を拵むゝ方探りのト人のうち不合堂あ
利支天さま観音さま仏利益を拵まして西の東も知
ら方の風で来いところを仏夏ゝ花土まで入来りまゝ
ゞ叶上ゝ又弟さんの居る家の知まゝ拵不仏卒ゝ
別ひゝ也まゝ亦見利の駅父さんや長母さんゞ吾俳の
家出政ーまゝを神隠ー不でも成ハせれゝ剛河でも

岡つゝゝ我風がつての意中家を出ゝゝ仏居ゞ
あゝ仏業ト成て悪のつと病形ひゝも悪て、不孝の
ゝの不孝ゝ仏卒を若で別々と械掘ゝて居まゝ拵不お
別ひゝとまゝト果ハ意水や神形ゝ仏形ゝも一筋不男
意ーの浪気ゝ仏先を素ゞ波を若ーまゝ乃中夏月
不おひゝ仏ある恥不意ゝと丹を弟ハれ不ゝゝ祝ども
仏の弱の絆ゝまゝ迷ひ出る駅路を幾次ゝ来て
ゝゝと花土の街衢の辻ゝを人不居て菖蒲ある

碓井戸の底へ出けまゝ半蔵人の落涙あらしと云人
家へ立入り宅へども知らぬ〳〵とのゝ対の者へ申みゝ
まゝ門不相さへ云丹のごゝ〳〵彼処不さち氏処不立幸ゞて
稍と彼の垂玉清ゞ家不入り「アノ出面例さあ者ゝ
世りをお弱紙中しゝ出ゞさいま生ト吹て来ゝり」
行ゞエと云々又世へ立出るお烏麦お古世八稜を打
かゞめ様のゝゝゝへ女を垂て「氏方さあハ樹木屋出ゞ
ゝの招不お見ゝけ中しまゝゞ強金横濱町のを氏屋

与左衛門さんを初ゞのお方でをどゝ下脇の見利ゝゝ
与左衛門さんのおるの与左衛門さんとゞ中をお人ゞ若お出
ゞゝ出ゞゝまゝせんゝ吹てお烏麦ゞ身を進め「ハイ七の
を江ゞの与左衛門さんと言んとせゞゞ忽此小口を押へて狂
様つお古世ゞさあを右又左又とゞ髪ゞ乱を化粧ゞ
せゞゞて寵ゞとゝる容者ゞ見ゝと云美ゝさい芝居町者ゝ
柳橋のあゝゝ小ゞ又ゞゝゝゝゝ紙ゞて年ゞ十七八
者ゞ見ゞ与左衛門の源義ゞ沢ある女ゝ推量者ゝ見ゞ


孝人

容子を称らんとて稱の獨不踏離「ある極貧俳諧
が仲間の中不足利こそうそうに来こ笑い流ゲ為てその人
が自分の居る家の狼不恐ところ隨為
不成こころ云ふ為うそんぐぶ樵ッを見ゲ女房とりの名で
大造狩男子ごと魚が養て居るのサト吹て お古世ハ
ふつまでも猫を追あて新ふりと「アノ女房さんゲ方
のお仲間の樵木屋さんへ来つて主処の家の狼と仮ゲ
出来まつこのでは居いませと言うけうしゲん対「ホンニ

主ん様お奥ハ何様でもうへつこのお仲間の樵木屋さんハ武士
近所では居いますクエ「主と丈ゲアノ彼の家ぐつけ絶家
まて仕舞 さけまで何処へ行て吹て来りゃア迷不知
所のサ然ゲおあさんハ何処へつお出で何とつてお名ゲエ丈
をお使ゆして迷ゲア女房さんとこの人お方不迷こころ右
様のつてと思ハ子と吹人お古世ハ何様ん情的賢人居う
ゲ「アノ吾儕ハ足利の持金や斉右衛と云ひて狼右
世とゆきもの女房さん不お同不勉こ様ら成ら表ハ用

ゲ方ノデ出ヘキモセズ。イノ卒ヒの寺又帝さんの弟ノ
ヒ指キモセ樵木屋さんを「丈ハ承知ゴヨ吾倆ゲ走ホ
ウヒて来てあげるゲ。アノおあさんハ臣利ミヤミミ一人で
薩去キモ来ミのクエ「ハイ香連の君も出ヒいキモゲ。ア
ソコ足を痛めキて宿屋ホ療で出ヒいキモ「左指
クエモハ能ヒの孤ニシ云ヒてあリて下弦ヒみ「丈ヒヤ
吾倆ゲ寺又帝さんと出ヒの来てか在の樵木屋しいノ
のを呼て来てよるミおあハ代処ホ後てか在しホ様ト

あげコロ〳〵と足を早めて行キまへゲ駄ゲ行ミシゲ猶ありて
息もセい〳〵家ノ来ノ「方ミ呼て来ミ云ヒるゲ採
モミのて呼ヒ行ミ〳〵おヒ入ゴヒノ子「何指ノミ迷て
飛ゴおヒをおヒ出せアしキ入誠ホ気の毒ミヒで出発
いキます」「何のサ主指ホ変ハ沢ハヒあいゲ。アノ健ヒい変ゲ
ヒのゴョおあのホ屋祇の樵木屋しいノ人ノ代ヒ出キモ代処
の物又ヒ云の後方のモノ不在ミのゴ向浦の須田村
ヒ入引城ミしサ丈ゴ〳〵後をひき猶て来ミりの指

へ行て試しに咲を咲さけ且つ何指由明こ地知さるへ
のサその種木屋の名人左次兵衛と順田村へ行
て咲て出流赤分解あへ変へそらう八子「ハイ為ス」
出発いまを主順田村と中しまもの八何方らへ来つて
宜しいやう「この川の向ふの右手をまアつ直ぐ行て香
物屋へ処へ出るこを処へ出るこを向浦と咲て丈こまき
順田村と為ス行てお出さと造作ハ赤いヨ「お蔭さ為ス
つまり人誠ホ為ス「ハイでお出ヨ迷こして

為ると日ガ暮て仕舞こ「左指ス〻バ向ふの里を」「何
処まを田舎香物へ出て「為ス〻ス出ると「礼を云
さへ義交ウ稼を為ス処を立出お鳥多ガ漬汁の虚
言を吉こ云ひ咲こるまく為を求めて押との堤の彼方
を香物より順田村さて為ス中ケの後影ス送ラて
行方ハ「チョツと右ガ方」「何指置へて浜さんの情合
のある猿ホ遠へ行へガ彼指美しい蕨為ス為りんぐらう
行方の云ハ指ホ為ら行へのごア云こ云こ云ハ行ハと

候六本左右言て来てゝゝゝ三圍あゝゝ待伏して甘く
ゆゝゝゝ遠へいゝゝめ首尾よく能吏アお芝居のお変化七
変いゝゝゝる仕支。ハテ宜敷抽ふさせてへものゝト仰ゝ
公案の狗の月等形ゝゝ當ゝ屋ゝ来るゝゝ帝の源
義ゝ花切疵を稜ふさゝ芥子玉絞りのゝ拭を拘い
仁寸ゝ本振り紺の役ひき新麻裏の茶屋ゝ織人ゝ
せど田形どこ本人ゝの残る天意の縁元ゝを抱で
二三変ゝきゝゝゝ肩の田辺の俠をゝゝ「柿さん」ま

保りゝゝ「ヲヤ早い祝エ食ハエ」「恵ゝ後ゝゝ来ゝ知さ」
今日ゝ日お癪さゝゝしゝの人のゝ本色ゝて本出ゝエ「ゝ宜ゝ知ゝ
「除ゝ狼ゝゝお癪さゝゝゝちゝゝ物ゝるのゝ気ゝゝ様ゝ耐ゝられ
ゝいゝゝ明日ゝゝ仕支情ゝ附ゝ作ゝゝ人のゝゝゝ」
ゝゝゝゝ仕支ゝ日お仕舞ゝ見ゝゝお武士さゝゝ本成ゝゝ
ゝゝのサ「ヲヤ否ゝ祝エ何ゝ招ゝて」「ゝ花本路さゝのゝ開
紙へ画を出ゝゝゝゝゝ何ゝ招ゝて刀称さゝゝの出家
本入ゝ重ゝ清の家本食客をゝて居ゝのゝゝ武士

成ぐいて取立て学うくうと称仏ケさるので釈父と申
れ流しくくとろが丈八伊よう結構ざと徒しどうに長る
くう亜とその稼うあて来さく考イ可笑ホ二本ざ
気の利お八ホ三ッ出来やせうサと喰人お鳥爽へ新
あら「お角ム方の高爽申美えかつくの不孤工
丈ざくう仕度不出ちの八居ざと云くのゴョお屋爽へ
のきあ八お嬢され不ろひ付き足利不番ざお古世きん
と情合不ろ八ト云きて源爺拘八「工伊拒しや

あくこと「お古ぜさんを迷ちせて眼をお作ぐざとのふくせ工
源さんおあの孫の向ゑ垢でうを大人しい振をして居ら
ちい孤ぎうの孤立と二の挽苗あうを抓らまでいよく辟せ
孤ば一言の意善申ホさば豆るまくゑ紫ホ流む壱
孤文お鳥爽ば眼ホ予両と申二千ホと申ろ爽るあくん

第八回

ちゃ長命寺の鐘の高ホ入れつげて半落の混雑しき
ちゃ孤うくう凡世を仕舞て帰りくる出茶屋の義ホ立在

で二人の男が額を合せ「エ、好八やもう日が暮て仕舞
のゝお鳥美師土のさうゝ云こと嫁とゝのゝいまゝ来れへ
で由遠やア去めへう家ア「成程侍士の妻ゝの色ゝまち
ざらけゝ由ゝ知と祝へゞ生ゝいゝ自ゝ早ゝいゝ代ゝ処ゝゝゝを迷ゝて歩
ゝ行て居ゝ日ゝ夜ゝア捕へゞゝゝゝゝ迄祝へゞやナ「お鳥美師土
の影しゝゝゝや年ゝゝゝゝゝ渡けゝゝと接美ゝ祝ゝゝて由百
ゝゝゝゝゝ

一延命かとうの孫判兵衛、盗ゞ受て呆とらア「丈
アらアア宜ゞ同じちの福兵天と拝んで居る田舎猪い
何処へ行て何を遂こして居るゞらう変とも孫後ゞけう
ト薩美の藩ゞう影を出「言方ゞ方見まり「来こ
きてこと被をう出て私語て対様へ方しる彼方よりも
奇ゞ人男のその変へ様ゞ者てあ生婚ゞ出ゞ島家ゞ猪ゞ
支へらを歌ゞ湯ゞう八家ゞ知ゞう須田村を居る
祖て来かる須田説ゞ方ゞ「ライ様さんライ様さん

と声ゞかけらをゞ古世へ「ハイ」と振ゞ返ゞ延鉄立ゞる二人の
男ゞ西方よりゞ例へ偽ゞう「自己ゞちゞアゞの須田村の
義へゞ肝八後ゞ六ゞ人義悪善根を第一の仏男ゞ変
名のゞのゞう先刻二人ゞ被井戸を通ゞて降ゞその時
ゞ方ゞ彼処の樹木ゞ尋ゞて居ると後方ゞう偽
ゞ変ゞう教へゞうゞうゞゞゞの用ゞ居ゞこのゞ終ゞ
ゞ行ゞ来ゞけをゞ来ゞ迷付ゞ居るのゞゞ此須田村へ
今義ゞ変ゞ兄ゞの居る家へちゞう送ゞて来ゞう

サア〳〵一刻不歩行移へト吹人方古世へ嫁やとうの人のの
〳〵二人を引くる不髪の結ぢう前の旅へ何も善うらぬ人達
と推量りて人他出せば「ハイ為和う四角へいますグ碓井
戸〳〵此方らへ来ゲ連の男小竜ま人民今後〳〵性
り手ず矣元ゲ〳〵人の卒かさへ方出方さつて下さいま
十二連のものぞへ虚を吐ねへナ手招方夏を言さつて角
已ッちゃア知って居ッア方る〳〵杆八「左招さ〳〵方人の夏角已
ゲ俗法方振ぞうう師さんの子番ぢゃア乳嘆ぐ四角〳〵へ

ふのぞらうョ。エ婦さん何不也ひ姉様へ様へ〳〵此方人〳〵
一番不歩行方せへ方此帰。ヲット方此帰ぢゃア移へ方此帰さ
の居る家へ連て行へ竜せへ者さう可毛さう不民利ぞ
ア〳〵遠〳〵彼招して居る移て来るあゃア深い現屋ゲ居
へ〳〵あらうサ「開ッ夏ア言ぞと知ってと夏。ノウ婦さん意と
ナ居る角へ方互ひぞ。サア〳〵民元へ御〳〵居ぞと性る方く
居移て仕て与ス帰さんの新を引人方せへト二人へ例〳〵雑
を指殺を知〳〵れ斗り不へ勧めらるまべ最〳〵方へ可怪

りのこうかくうお古世へ恐怖さあそろーさ不遁きんと
きどど徐方あく拓その侍不立在で「打角の出入切と
を不為るせうで出産いまもが民今日や走通り連の
男ゲ来りまもてうく「見サ〳〵そん赤階〳〵拓へ夏を云
赤さん赤史ぢ史ア何ぐう自己こちゲ悪い老で日為せり不
拓ん考うア品は拓へ「迷惑いて居るのゲ可老さうさ
不為る家へ二人して案内言うしへうざるお世作日著
義仏で言て居るのを編テや鬼と人らもちゃア俗り

割不合拓へ考あうぐ「アレサ五拓ぐ八出産いませんと二人
さみの品百いみがうう出産いますぐ渡うう連ゲ心素不来り
まもきの出出産いまも「出勢あう〳〵活情ごョイ拓八ふり
「そうう墨うと品つうぐ何拓ぐ日史ゲや奥の永と「出
さぐア成史へ「古拓考う〳〵「コウ拓工見ゲど二人ゲ仏切に云
いんあ可怪系どる家うさ出方の意地ぐ与文帝の居る抜不
窓へ連て雑虚云う傑を出さ拓へぢやア仏と呼ばて夜ゲ拾る
敵「拓ともく怪〳〵人ゲまて史ぢうぢやア著蔵男の派

春の
かくと付ろ
ぶ
芳夷

ゞ立ち入へサブきりくとふ天帝の弄る樹木庭まで歩行
ゞ入へト二人ゝ矢庭ホ立かゝり「汝ら出てお古世へ出で奪ふ
ホ稼ゝ出て奪のごく捨方ゆあくゝ入ゝる打伐時の口ホ
やゝ撲あひゝゝ立出る男ゞ侯六の利猿ゝゝて突殺まて肝
八を押除て「伐ゞおあゝちやゝ花ゝゝと捕へて伐方へ連
て往ゝと言のゞ。エ宜加減ホあゞけて逃ゝとお古世を
囲ゝて立塞ゞまゞ侯六ゆ肝八ゆ侯僧足を踏ゝあて囲
栗服をおきいゞ「赤ゝゞ伐ゞ伐処の拙泉ゞ「伐ゝゝ人

を突のけゝその周孫をゆゝゝゝ下去方ゝして往来
まゞ代方の男へせゝ笑へ「自己の連の代狼をおあゝち
ゞ引渡ゝて木の世男ゝ面へゆゆ周て お金ホ高ゝと為る
ゝゝ処でちゝゝ押のけゝこのサ吏ゞ伐拙ゝ死屋ゞ子
と平気ホ新ホ二人へいよゝく拳と固めて例へゝ「仮令ゝ
あの連ホゆゝゝ方人二人ゞ人切ホ為る家を教へて来る
のホ伐ゞ不足で突除ゝ脱ゞ者を折折て板を舎ゝゝ受
殆をゝ水ト云へゝ去ゝ一ときホ極ゝかるを彼方る男人更に

て
夏とも せず 板つ滑りつゝ會沢うち 肝八巻と振かぎ」骨石
を眼ゞけて おかる 手を と 掴んで 脇負 投ゞ つさり 向
へ 抛らるて 赤の根で 天意を突こう 「アイタヽヽ」と 平張
う 侯 六 この石ゞ 彼方 ある 男の 拘 於 ちつと 揉 揉 倒
さんと 為 ゞ ゝ ろを ゞ 方の 男ハ 右の 手で 向ゞ 合 る 侯 六
ゞ 面へ 一ト 当 ぴつ ちやり 当 ひるむを ぢっと 揉 潜り 見 と
ゝて 投 出せ ず 作 むけ さ ゞ ゞ 倒 ゞ て ゞ
ゝ ぎ ゞ 方の 男ハ ゞ ゞ ゞ

薬くゝ物をかもつめ「何方さまゝ方なゞ」ませんゞ発いとこ
ろをお教ひてくださいこお礼のやさうに指もの有難うそんゞまん
ト咲くゝ方のその男いお古世ゞ言葉を忘れ方なり」「モシ
おあねえい花土のお方ぢゃア出来へやせん私ト云へまして
お古世い見もまくゝ物あるゝ人やとろうの故」「ハイとぞり
不行詰を頂ゆい意義も出ざりけり

風見艸二編の上終

春宵新話 風見草第二編巻之中

東都 梅亭金鵞編次

第九回

お古世い狩八俊六らを追ゝ出らして故ゝ亦その人の心
さへ善ゝ悪ゝとおもうゝて頂ゆい意義を為さぬ彼方の男
いお微笑「成ゞどお方さんの挨拶の出来ぬ私へもむご今の
二人の仇ものゝ形うを洗ゝ故へ音俳の風形と見も矢張
勾引ゝ追剥仲ゝとろうの日些も見ぢゃア出来へゃ

せんが今の牧蔵は醒井宿で人の知る名うての悪漢先
刻吾儕が土手下を通りもぐらが切る草履の鼻緒と
手療治不出来して居るとあの二人の話
後者へ牧蔵と雪ちゃん小三郎利ごろつく夏が繁盛と耳へ
這入こうこと丈やア氏方の生まれ古仁句引きうとこ云へ流
の浪うぢう移へば一ツ氏ふしとぶつ人由来新吉人の四番
なお一ぜん肩を入まる乳で容ふをうかが人稼の落ちう宜
時ふと表出て連の男のつまり御お掛ぢうとうお花ふ呼で

牧らをそこぐこうり一変幅をまうせこい見りやア吾儕の推奥
ぐエモンおあうんが兵一人で些処らの辺を見満ふこと逆つま
歩りて居こ日ふやア亦彼牧らの名ふかるが須田村ハ何と
いう家へ居移て彼方さるのご子「先の名あハ何ぢませんが氏
氏須田村へ醒井宿ふ紙して手つこ桂本屋へ来りますの
で四度のまもト吟て彼方ハ小育を傾げ「須田村源代郎
井戸ふうを毎日こく絶めぐうて歩りが吾儕の高妻ぐ
醒井宿ふして須田村へ引紙しに来こ家ふうの小三年七年

の後ろ〳〵にてまア一杯召上がへやせんぜ「そんなこゝば彼程お戸
ゐる氏須田村へ引越して来つて居ハ位者ハいませんと王「ぐ仏ハ
居て日夜酒ハ飲ものごゝ〳〵一杯〳〵須田村
を呼て歩行て出らんかせへやー然ハ言りのくいまゝ日が暮まら
て仕舞さうゝ今の奴等ゞ出来てまゝ来ん〳〵と白ハ〳〵
まゝ〳〵為ハ夏ハ始日ゐて今夜ハ宿屋へお泊んなせへ吾妻
橋のことゝまゝ吾俳ゞ逃つゝとゆゝ〳〵ト勧める言葉ハ自然
んの言葉ハんえけ目ゞ老き組を扱ゝまゝその恩人ハ所のとを

包ハ最日罪ゐゝト出て気の毒さうハ「出ん切ハ
生仰て下さいまゝて居がゝう出来ませ今夜者のお泊
の色ろ吾俳ハ花戸の老ゞハ出ませんハ他の足利の拾金
者右衛門とやもめの嬢吉世と云ハ老ゞ出ませんて彼
方ハ怕り「王仏の者右衛門のお嬢ハのお吉世さゐゞ出ませの
まゝとト呆まゝ拾ゐて居けるゞ刻北斗を変て「出
縁とゐんのハ石兵衛本ゐイやゐうゆし上海ゐ面目ゐゞ吾俳
ハ安兵衛のお家の通氏俳須主勧て居まゝて長七の娘の長女弟

とやきりの爰嬢のおミツ様のところまでおつ人世ふる傳を綴て
居ぶ拵女郎入り賭麻でお居を引負叔父の勧善を
うう妹枝指の果八潔らぬ女ふうう対今ぢゃアあるく〜お嬢〜
ふ成ら移へ風ぶで四産へやまぶ叔父八元より吾俳日こ世の弱
の四家来ぎぢ四恩八高見八致〜ぢ世〜及ぢぢ有ぐうおカホト
やまと出来ぬ対のとあるまど大家のお家のお嬢さみがお供
も連ざさ処いうを一人歩行をあきるうう定め〜稼く入りうん
ぶ沢ぶ為てで四産へやせうぶおいを産ぐくお嬢〜を放て

お安せるの世へや〜紙い云りく徒来ぬ佛国つる〜四辺ア人
ぢ八〜「僥倖ぢふ在桃茶屋ぢの昭居で寛ぐうとトお古世
を伸ひ引出〜ぢ麻机ふ稼を桃さぢまびお古世八今ぢう
地獄ぬ〜仏ふ産へる仏地〜ぢ桃〜ぢ対を産め「丈
ぶ八ア〜ぢおさんが長七の湯の長又弟さんと世〜でふ供ぢき
ふ八足剣の郎ふお花のぢ方ぢふ親寄さみのお蘭ア利ぢ矣
さ義のお引食せうと思八ぢ矣八人で彼桃ぢつてさ延ら
四辺を五〜漏付ぢ産のも彼桃ぢ〜〜ぢ〜〜ぢ〜〜ぢ又弟ぶ後

を追ひ捕の支をゝ出来ず仕方なく帰りて鶴井戸を引張り次
第に妻殺さる「あの須田村お寺さんのお庫の家ぶ
日夜、今夜の者日の処をどう治つて宜さへ初めを後
先かまつはれ、変り別不孝の罰ゝ人細さを推量
して方不成て下さのまゝ帰て此方八更寝を抱きくゝして
ゝ「故徒共攘日多ぷ人衆お支をお者ゝお者の
ゝ徒追人ふも捕まゝ者お無がけの約下鶴ぢを所の者
の振ふ日者ろ三日四日の居中を仏支もうくお出ゝて

ゝ二一陸ふおんぶ出夏月を中ーて日迎日足利へお帰ふ
ゝ茂多へゝゝ吾俗ぶ引猪て与ゝ寄さんの在家も居ふ
おあさんのお世話をもしゝのハみくぶ今さゝ何て張
しませう度い世界小支を加年女者支を不日ち今日ハ
二朱ゝ一歩ゝ殺引度徒衣の仕送を宜支ゝて喜
悦ぶ果ハ小屋入り雑人の仲ゝ雪踏来ーの長ゝ寄と
立ゝ居る徒所ぶ迫ゝ後悔して彼招ふのちゝ探て
返しの付物へ現屋と今ぢゝ葬ゝ諦ゝて涉牙ぶ来

の松風不落世の耳ハ洗しそも洗し者うる人別の外の赤
生の小屋住居ハ泳猫不考つても一夜のお者を為
夏さへ成らねと考へバお嬢さ様笑不例が驚きまさと吹
てお言せいまと更不特むカを笑ひて赤蓑まてで居うう
考「成程今のお影しでハ何の招も考ういあるまいけまど
お金を出さと又所へ帰まる招不旅とのあを人の影しで
吹キ一さが考のお金ぞハ少ふらって在招りく秋ハ出来
まさまへうト風呂敷包こを見出せバ長ス帯ハ入れこ斗り

皆時盗へ居こるしが「如何不由災難のおつ〜言通り金さへ
出せバ根ク素ハ人元の人名小成ま移へ変ハ出産へやせんが毎
日く出歩ひて居招りのおやア考物お活斗。ニお嬢さんへ
彼招して遠く居不出て来こるのお方不お盗まるぞハ何
招おさるお気で出産へやさと「釈父さんや義母さんを出
抜て彼招して家を出こうハ命の為ぞう矢ス帯さんをお
居招中して考上で知ニぞハ死で仕舞光悟更ら外
ハ今こうり何招も仕招ハ出産いませんト言声さへ由は

涙をぬぐうて泣き眼を拭へば長五郎は泣き出つゝ「アヽ
丈夫など迫ぬ石ころ除りごとに寄じまつそがお一人で
迷ひてお在まつては明日の夜のお者ぬ
さへ差支へ原半ばなく悪漢どもを捕生つて空ようお
用ぬお座あるこゝは彩まて居るこゝ丈より「居吾俤のお屋へ
お在ト云うみてもぢく〳〵と矢憲を撫「自分ぢ式相お所ぬ
成さのを先嬢まをおいこゝ中先ぢぐ丈ぬい推と
嘲しも巴居のまたこゝ今夜は吾俤のお屋へお泊ん

おまつて不意のまゝ今てはお房は死でまつたのお分の秘密
は不残別のこゝろぬ注つて居まをこゝ二日は二日は相と
申して伸ゝ者の人差へ智と祝へ相ぬ会義中して金須田
村番横堀井戸まゝを一彩こゝ吾俤ぢ長五郎さんこゝ
のお方をお名祝申して丈失せこゝ〳〵ト言とてお吉を
人海祝ど差つまりこゝる所の弱義ぬ兎の角もし祝
これはとバ長五郎は歩ようこび「与五郎さんとこゝぢお
在まこる横木屋の家さへ智とりあア小屋へお泊んまを

つゝ莫大の内証ありて美嬢のお名が些でも採汚るゝ事ア
嫌ッやせんッやと〳〵彼相まア極りが付たゝ事へ厚つて實
りと出れ後をゆしやせうサと立あがり〳〵が採多をして「へ
モシ お嬢さまと先刻い一ぱ者そこらく乳で高麦道具
を茶の中へ隠して逃て出うの中うぶいろく本生を現
まもゼト抵茶屋のうちを出堤の縁ある茂こゝゝ採出
る荷茶の紐を肩ぶ歩ける古経る竹の子笠をまま
拾て「サアお古せさま茶りもうト笑てお古せ抵茶

屋の薄美を出る形〳〵不亦立ずゝて眺月〳〵と心
処へ来かゝる肝八後ゝ見をつゝよりあ方〳〵「どうとい生
らぬト紙付と「ちやちこと女赤ト長又帝参をのべて後ゝ
ゞ膳へ一ッ美の麦「ウンと斗り不作反を又むきも者
らぬ足をあげ太〳〵かゝる肝八ゞ後のあゝを勝かへせ
バ肝八後方へけ〳〵飛ゞ土ゞ〳〵不へ〳〵〳〵後ゝの
る不長又帝お古せゞゞを採「去来〳〵と隅田の
堤を美煮不美柴のかゝへゞ美ゞせける

第十回

爰に玄清が舎兄人あり源義八幡時町の義に遇
の庵つくろひに他るよう押との他に外記
が娘お園佳女お梅をさとめて一人お竹お松その隣の
老婆を請て清のこゝろ走らせその画
よう尾張の隅紙屋風を自絵に彩色変とうの
梅木屋住吉八拵おきく好こに他ある山形
系木人形の看獻仕まも立人の乳に惚て業を

称するのこゝろざし方々に人品自流に勝まさて人
元より故源義が素性を宮に嘘と誠をおき離て宮
ゐぐに影ーけまで玄清が家に居り梅木屋住吉に
出入より我家に来りて奉公せよ武士に元て仕さ
せんと勧めらるを僥倖に義に遇て外
記左衛門が庵に従ふ或は祐筆ふりの役を
為て名さへ赤源三郎と改め昨日に似ぬ
又郎が稜に狭む両刀日に利の地に有一時

あるひ笑ふ「剣法柔術弓矢鉄砲の藝術ホンのうちの
伝さへバ自づと雪こしく入ゑゑけつと今日ハ朝より
外記左衛門剣法指南ホ出けまバ表発表ハ閑静
なる廊下を来かる与五郎の源三郎を見るより由佑
女お指ゲ声をかけ「アモシ源三郎さん一すゝかあホ
用ゲ為のこョと吹人式方ハ立ち「ハイ何でも見いま
せ「否あのゞ私エ見用をしてサ何でも見いませも
ものゞ「用ゲ為とお云ゞゝ何でも見いませと吹

さのゲ可笑のエ「ア可笑の笑のサ。ゝ指う何の形ひゲ為
のゞナとゝ何のとゝお云あゝ笑正あのゞゝ「いの見ーサ
捷本史の成りよりさとゝあのて怪懐人も誠を的せバ
武田勝教。エヘン と咳をゝひを表るゲゝ笑示ゝゝひ
「式ゞ式ゞ史ア袴の板ゲ為ゝ母ゝ後へ別深で来ゝのサと云
ゞ彼方へ徒ゝと為るをお指ハ「アレサーと引間ゝ「用ゲ
為とゝの人の不何ゞらゝ私エ「源元ゝ笑正ホクエ「笑正
ゞア私よりと源三郎の新をさも笑冥で惚ゝ為ゝ

しの人風ホ考へつゝ又諸て居る「ケア早く用のあるとき」
きうかを云ホト急立らまて渦巻吻「ゆうゝく焦ッ元」
祇園のゝ祇工見ざうゝ彼の娘八重姫指グホ惚ホ
ホ元理ハるい「伺の変ゞ矢張日永のホ憂ミウ「伺
指しゝゝ ホ憂ゝどうゝその四用とい人の人子伺指
ホ奏ゝて ホ園のゝョゝに辺を又回ー声を窮め「ア
ホ嬢さるゞ押上の地ゞホ指系をホきうゝ時ゝ
処ホ在の氏ホ人ホト脊中を徐と抑きあゞゝ「ん
底ゝゝ丸ッきり惚ゝホ仕舞あそだゝて氏氏のホ塞ゞ
気ホ大方史と推号ホまゝゝ主くの方ゝゝれを向て祭
ホホ吹ゆうまゝと家ゝの通りホあホ病ホ伺ホ格
ゝ主と悩ゝ罪ゞ主くゝありと句の果いホ命ホ同
る指ホ変ホるゝゝ悪いホ元指ゝゝ八けもど
ホ業ホ ホ警ホ ホ親病人ホ ホあゝ外ホ
あゝゝ主のゞけまゝど冨ゞ主ゝ仕方ホ今日ま
で静ゝ主ゝのサ史ゞゝゝ吾俯と一所ホ ホ舎へ

徒てお嬢さまのお命のにくらく何ごとと云申しあげ元
癇疾病のお塞ぎをついちやつくくとお治しとまと
捕へて引張る源三郎は実の面目ありの「あんぢか秋
さまがお留守でお奥の人ぢ居ると云て事故も
祖父ぢのサア〳〵吾儕は用ゲあるト振もつて徒おいて
をお捕へ牧田引留て「アレサお嬢さまがお命の小四用
で召まさのごくく「すお弟屋のお稼敷まで吾儕と
一別お出と云くく「其正あくぐ徒けまぐ振り徒

らあの夏を云へくく虚言ごらくと云つてサ「何ぐ
祖父殿暮らしの八の字あんぞを捕へて言まて
方由笑ふおくく「生でも仮ぐ立くくサ「仮ぐ立くく
お嬢さまのお弟屋へ徒て何と傷を家を言て
おあげト稼敷づくく源三郎をお捕へお園の弟屋へ
徒まく「アノお嬢さまく源三郎が来りまくくく
小屋あく吾儕のやしき屋くく小四用をト言ク障
子を引明て源三郎を中へ入まお室の側へ突き

ゝ[illegible]その所ハ掛軸へ出ゐと座ふぴつ者ゝト傳
ド
子を固く遠まゝゝ　孫こ帝ハお掛ふ押さ云いず
ゝゝ[illegible]ゝ　ゝゝ[illegible]ゝとろけてお屋ゞ掛りゝる案の例まで
ゝ[illegible]ゝしゞ周章て後へ飛ゝ[illegible]ゝ平ゝゝ突
て「孫お掛ゞ軍戦を殺ゝとのゝ飛ゞ蕪相出めん拉
ゝゝゝゝゝ倍乳ばお屋ハ乳の毒ゝゝふ眼え
を[illegible]ゝ振ゝて「アレ[illegible]招ふ為てい困りまもおあ
ゞ蕪れでもお掛のいゝゞゝゝ者俳ゞ不殘[illegible]の

のゝゝゝ「イエ〳〵　勿体ないゝ夏を仕作ます生を付く
の倉率中名何能乳を付ます人ゝト天意を押へのゝ
くゝ尻ゞゝ[illegible]て[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
さ招ふお掛ゞ中し少ま[illegible]ゝふ出用ハ何ゞ出[illegible]
ゝト宮ハまてお固ハのゝ能新を赤ゝ私ゝ乳に徳
結へ裁ー能ハを掛ゞゝ引ゝゝ顕を衣服の裕へさ
入まて皆時のゝへゝ為さゞゝゝ案のゝの半切ゝ
何ゝゝゝゝ〳〵　徳めて出る紙をゝゝく毛深ゝ

帝げ者へ出「アヽ」と面皮と編まるのが哀しいが
仮令死でもこの夏だろうハ言出さまいと思つて居さが
お前不穏く勧めらるを後々の仏不成まゝと用ゐず
りの人の人を一首人不知をあい招ゐて結まア別れて又
て「お長ト言ふ人稍と口のうち深之帝ハ何やら知ら結
ど出るりのを良不接げ「左招ゐゝお会りのを
彼方へ招く人来りまし人結組又を殺ト障子
引きあけ風を辺らゝその後自分の子舎へのき旅由

羅ねを焼俳不胸抱[illegible]ゐゝと渦巻「やゝく元
の毒お思ひをしゝお拵め工事戦不変を知て人を
死ぬめ不意しゝ史アゲつゝと言ゝ懐中かきさぐり「
左招いゝりゝお攘ゐゝ由何ぞ可怪お仰ゐ
ハテ何招お夏ゐ出て五ゐうト彼半切を採出て被
けば中ゐハ一首の句
恋ぶまどゝを不出りけゝ我意を
りの史思ゐかゝ人の宮まぐ

さくる
春はとが
ふ色花
考人

「フムウ丈だけお物の言ひぶりの
者
若い者自分の体を引ん張り
泉を捕へて意慕お吉のコトニ変こと
ら逃し方を探めて居ようしが「若し自分の
已惚で皆遠ひうと思つて居る外不判
法の外ひ方ひ弥お徳の事のあるお宝さま
のお要ぎ式不附ての設あるが冥加不能つて
直ぐ今と成ちい主と家来仕振
ぎあるものうちに気へ見るう捨ても色色で嫌い指
で活く方く気を探種ぎ方こと出来こト投着と
ちて居ようしが「アハア何ぞ云ひ
ど方へ逃て来て生活の家不居れが投宿女のお鳥
めが附つまりつ口設のでで彼指お惟振の方が
りのと取つる遠へて一度でも探ようと迄と大変と
抜つ滑りつ方て居るうちに屋敷へ来るやう不
成て稍く朝夕不居こと怨嫌こと吹あくること

意不淺ゝゝ此お爲お攘さゝる方ゝゝ攘てゆ
えお考ゝるのゞゞお主と家来の差別ゞゝまゞ
然りお決不ゆ正ゝお能めへと云て毛下お訪いる
のゆ此方ゞ宜しゝゝゝけゞ何ゞゝ招ゆ惜しい
招ゞトまゝゝ多を組て皆時かんゞへ「史お烏
矣めゞ何招して お古世の夏を知ゝゝゝ何程史
て毛一形お森ゝの情合お敬ゝゝ先招いゝのト
苛生て斗ゝで彰しを考へゞ万一此方お考る夏

ゞ是利へで毛知まて考ゝゝお古世ゞゝて毛意笑抑お
考ゝ主を持の抗入りを考ゆゝゝ生笑で祭へゝゝ
何招いゝ夏お放ゝゝも知是祭ゝ先招して又まゞ空
然と此方で女お引かゝゝ逆いゝで毛拾へゝゝ日お
持金屋を出ゝゝまゝ是と考ゝ訪法夏ゝ彰ゝゝゞ
手彰是を用ゝ是お何で毛彼で毛ゝ言是ゝ日お二進
毛三進毛能へ理屈お烏矣の招お悪掃ゝゝ出
吉下月ゞ主ゝて考ゞゝお古世と二人ゝゝゝ何

方が何方と申さへ祇園様へ参詣致しまして帰りに
宝船おかの方のものおかの八ツ何船と云ふ空らうらうとして
中くに気が揉てアヽもちやもちやに成て来ると狗松
おろ〳〵我家へ帰り居たりけるとぞ語りける

風見艸二編の中終

春霄新話 風見草第二編巻之下

東都 梅亭金我鳥編次

第十一回

お拂ハお国の傍へより阿辺を見まわし小声にて「アノ
お嬢さまへ何故あんお不早く源三郎がおるお舎と下
アまきくこの世界へまいりますエ彼祇お教へヤしこの不美嬢ち
何不申云作ぢ不帰してお出なり祇ぢ！この父ハ世界へ
せんう吾倆ハお松やお竹が彼方らのお仕度を済して例

利の男不早卒と案ずるに悪いと病まいとくくお屠
下の口のところ不番人を持て居るのでは居ないますが
深三郎八仏と変蟹不申しまして喰こてお宅へ者の
悪さう不新を殺らめめ〳〵と考傍向て居こうしが
「お為が稼く不云てお長ざくく左指四つくくこつこ
けもど仏ざう滅不乳の毒でロへ人些も出るいりのヲ」
アレ手指赤お乳のお弱い支でのけまたものゝむ吉
傍どもの拵るるは連でさへ自分の惚さ男のあでへ

飛栄グあつてゆへ指不口八利ません〳〵お恥ういのハ
出むでは居いまたが深三郎の方でも支ハく変蟹
をお養申しまして不頼赤ざく〳〵役去不嬉て人ゆ
案三郎の初花ゆまさ田こ助の別新のお上品でお宅
乳ざくく吉永町の拵女不も寿柳橋の唱妓不も
お蟹さゆの指不お美ーくくて人好のきるお方ら
あへト常平日のお喝変蟹久蟹グ口を公人で口後ゆ深
三郎のたくくく歩不物て口説くこくの口居い

まきけまど何を十四五歳人さま由来如何あいし健
んで居まきのごくくおヲーー為を内人出流於でせ拙
ー拙んで公方の中ヲ成まきりのを恵痛くくくて
お在拙をきくくサ憂つくいぢやアいきせんと私エ
「丈で由仕方ゲるいりのヲ」「さで帰ーて仕義あさい
まくのヲエ「あヲ不左拙で由ゑで由「彼拙ヲきや
くつて由に相流をお洞へあさいまくのご子「ヲやきアア
お流ゲ居ヲト眼の孫をちんのう居せあゲく「何

ヲ由洞へやヲ右あいゲ机のと不廣げて居くく百人肩の
一夕拙ヲ平恵釜の弟の恐ぶきどくヲ不出けりと云
くくくゲ「居て居くくくく丈をきて源三郎ヲ拙ーて者
つくゲ何ゲヲ云の毒らくヲて陛へ出きと新ゲ弟つ
ヲーと拙て恵流ハ「ヲやくヲ弟ヲきて人あるる
貴恵ゲヲ源拙で世ハ宜ヲ何故百人肩の中のくく
あくでをヲ云拙でくくのでいきアエ「吾俳
ヲハ拙出来るへうへヲ踊くて居くのを拙や出人と

おお不宮正さまて仏指四つ彼指やつ深之帝と弱
仏のうちへト言うけ鬢のつ之へ二三本敷かつて乗る
毛敷毛を指の先で指つてある「傷うく品人切て
美蓋の前で仏で出仏お出り指だ一キ之深之
帝ゲ今ぐ人拝見いつて乗うう孤不嘉娘で
居ませうお降りのせうちゃ不一寸容子を窺つてト立人
と居しうちの打つつ掘をだつく孤て来るお牛が
色を切赤ゲつ「モシ」お嬢さまエ大変で出出へます

ト言ウ障子引あくまぶお掘ハ怕ア「エ、モ作山ホ声と
あて仏夏ゲ居まつさのごとと品ア孤「ヨホ」史でもお嬢
さ会の大出見賀の根樹坂岩六さまゲお出ホさへきつ
つサと云ウ孤らねさうちホのそりくと見端ちと
仏方へ来ウ岩六ゲお宮の子舎をさ狭き「イヤ」れ智
らを前ホ物ホ水仲ホでこの人口悪の駅五を続りへ
引結イ逃て。エモシお宮さん人ゲ顔を不成て来まつへ
をゼトお宮ゲ居ヨへぎつて這入り馬糞袴のひご押

ひとまき長枝猫ひ居りたがら「今日ハ挑来家の騒
古日で出生ハ早朝より御出りけ不成の人知まて居ら
一刻日まく寄つて云赤ゞゝお宅の新を白眼を出
惚くあることの人風不志イつと又赤ゞゝ「美しいお顔
をかたを抓又いつゝと存ゞゝこゝろゞイヤ結ゝ
あの奴者ゞ藏ゝで来るこの七大きく延引ゝとゝ傍
を又ゝり「何指ゞお抓チト辯を通して彼方へ彼人も
眼あつ成めへお井日左指ゞ何指佳女の勅仕でも

お攘さゝの侍へ大びりゝ付て居る斗りゞ紙でもあめへゞ
抓ゝゝ「吾俳ハ攘指で出居の出ゝゝ美美の四ゝ赤お美し
いお方ゞ弘為入と抓の夏お攘さゝのお例不ゝゝ付て
居て離とせん「吾俳ハ出ゝ根樹奴さゝゞお美へ
お出抓でゝゝゝお例不居ゝゝ除前へ佳元ハ
四居へませんゞ何指ゝゝ沢でゞ居いませう私工「
夫ゝゝ婚又指めゝ何時でも此処へ来るゝゝ不おお
ゝち不嫌ゞゝゝ耳ゞゝゝ居て来るゝと言赤

◎秋竹枕
いろ
出来て
明ら代
こうこ
雲月

ぐゝお国の方へ撫ををめ「モシ一猴戴きこへ子芙蓉
の花車お女自「イエ〳〵夫ハ放もせん根樹坂さ女ホ
ハ吾倆ゲさーとまも彩報お至人と出家来でも猴孤斗
アスハまさ別りの。サア〳〵芙蓉のお煙草入を此方らへ
お出拵でせト芙六の枝へ手を入を煙草入を探出
「アレお煙草ヨと五カらを「ヒヤ月塊コレ〳〵と懐
中ようして煙草を探出お牛ぐあへ投り出せでお牛
ハお掛と新又合せ「ヨヤ〳〵孝蘭ホ萠黄延紙ち

ふも宗元ホお掛のの長斗ヒでもお掛さん子工迷さぞ
ホハ花ら至とまハ「モシ根樹坂さ女へお牛ぐ伊ぐゝ彼招
ホ夏ぞゝうして花まそゝうお元をおつみ拵ぞ医ヨ
「ヘシ成い若ぐ〳〵そゝい成らずサと撫月でお宝の新
を見るお牛ハ煙草を吸つみて「ハイ呂とゝとゝ出
を煙草を呂六ゝうて大平ホ欲ともぐゝちり一角ぐ
浩つて煙うぐ通ゝう新ぐ「伊拵〳〵ん子長り見ア学
絶新〳〵とお牛ぐあへ煙草を拵とぐお牛ハ掛て笑ひ

あぐら「アレ主招小お痛疾をお祓」雅楽子
何招て語つてこの世界のますらう。子エ お指さん此
お煙草い吾俳の心を案て其このうち知きるのヨ」
丈りやうお根樹坂さんのお指ものゴのヲお煙草
ぢつて義然のうい遠ェ祓「其ぶお左指なのゴヨ」お
煙草とうみて吾俳の芝入サこのハ根樹坂さんハ西
あい「語う祓ェ夏を嗚らぎと不く煙草を除せ熱
ライ「ハイ〳〵芝を入うらこと「吾俳由」ヲ港をかけ

ヲノウ根樹坂岩六さんとうけて何と解お世ハ岩六お
煙草を吹付て出「あぐら「アイウ根樹坂岩六と
かけてご子お待ヨッエを見〳〵れ撲こうの家の沢菴と
解「ちうハエ「仏ェこうハ押ガ法ト云うけて也て云
「何指しておあお解るのあう「イエ此家こと解ます
「何指エ「根樹坂岩六さんとかけてお馬の陰茎と
解こうい大きうつてお立流ご「ヲあ〳〵語こうい夏を
お云お祓エ「丈ぢやァ何と云ふのゴエ「コレ〳〵何と云ふ

抓と仕方の名ぢを出して縋ふ掛るふ降りふ失礼
な方ナ「まア手拍ふ暮ふ夏を出つしやらぎとか
笑拍ぎせヨ。アノヲ根樹坂岩六さゑとかみて垢の付きの
髪の毛こういきつてこらいと人ぐらの「岩縋め工人ぐ
妙こらいと言こらて結るものうお窪さんぐ左拍云て
兵ふこうちゃア「お寝さゑぐ手拍ふ夏を云伝ら
のんこう吾俳ぐ恵ふ無つて赤ふ赤ふ赤ふ工お寝さゑ「
お邪ぐんいこ拍ふ根樹坂さゑぐ宮のう銘工「吾俳ハ

弱気このよう武張こうぐ拍ぐこうこうサ「ホンニ左拍
ぐこうこうる銘工「吾俳ハ一ツ縋を掛ぐ頭ハ失張
岩六さゑ「まこう」合ふ出さるのう「ヲおこ
云てもお嫁ぐこうこうと言のぐこうこう仕方ぐ
ません銘工「さうさこう根樹坂岩六さゑとうみて縋
幸を嘗こうお嬢こさゑハト言ぐこうこう云て様ぐハのぐ
「鼻を掛んで吉を出て「ふふイけ無ト振むこう形
こうお私ぐ声でお邪りこと言ふ警さこうふ一同お窪ぐ

る舎を立いでゝ玄関さしてぞ出ぬける

第十二回

お雪ハ父なる外記左衛門が戻りを迎へ機嫌をとり
て食元の用を済して後我吾るへ帰らんと掛新長羽織
をしゞ机の脇の水桶へ挿さる花を活直さんとんづく
り只一人座を立いで他ごゝを彼方此方と見めぐり
て紅白きを離へる梅の花を手折くと花櫃の側へ
寄ところを後方ハ何時之人ありて後のあたりへ抱付き

「ハッ」と斗り見ハ見之見六ゝ眼瞬をさげお雪の新を
おつゝと見おぐゝ「今剣術の座場へ往らしさるゝと
他色の遠ゝ教然しゝ長板の上をゝハ何でも吾ら
ゞ意人と思づいゝゝ振返して出て来て又見ぶ遠ひ
方。モシお雪さん松竹梅のお附人あゝハ探ゝゝ
ゞゝゝ何卒ゝいお返辞をし捕へるを放さゝを
お雪ハ新を赤くして「何方ゝ方ゝゝゝ四軍戦ハ
第六さんの処をお殺し他ハ他ハかるを押とゞめ「

見いたらうお宮さん私うがるのは祇ぐある竹藪おあると思
うたら出雲のお振ふとあつと流ぐと巳辺い茂つて樋ぐとお
婆女ど目の邪魔のそうち一寸向ふの稲荷堂へサアまアお出く
ねを採て引をお宮い振さらん「さ指ふおおぶり祇ぐす
とお竹やお梅ふ云告ま生ト逃るを祇も採祇を押のけ
てまつと強いぐ池根を続とて内産へ逃ぐ入ばば縋のて思六
由彦ふ郎却食ふ儆りと突あるうる源三郎ぐ指るる蓬
ふ採為しひさ為をつ入て鶯ま周章「見い〳〵出食ぐら

ふ入し来ぐら根樹吸さ為のお出とも知らぐ飛ぐ森お出ふ
まつと実平で先と布流まぐ思六ハ面を脱ら源三郎を向
めつけて「ヤア流ぐとぐつと棟素屋の源義イヤサ故ら
の源三郎ふ何で成共の奥の先へ渡つて蓬を付つけとつウ
狀つとつお宮さんと杜若とぐ相對の水入らそでは産え
の穂也を嘶と来る蓬猿狐の意振ぐふお遠あるぬト
源三郎が脱着ふ情かまるうちお宮いお褸ふ振
て飛ふ俗ひお足を弔め振敷ちくへ進る四条吳六いふく

「汝が法で今日こそは不入と思うと為さるのを
イヤサ 我が法で必ず入れんと約束をした元の枝を探してもと
ぞ有りもせぬ所へ昨日今日来てまぐれもせぬ
ちっとも剣術の道場でも出来ぬ人の数に入る者か
の意のさぞイヤサ意もせぬ不入る疫病神を
るのを捨ておいて入来の為に感心したと云
なぐる拳を揚げておんとまるとのてを押へて深三郎「金
貴君がお出とは何ぞ、梅の木の墓を掃き捨て持ち

「ヤア やっぱり思った通り 庭掃の役人の意地悪の疫病神の墓
庭先の掃除をするのは下賤の役人の意地悪の疫病神の墓
取ったの蓋とは方の拳の加減もまだ意へつい蓋
深と言ってまるで深三郎が押へるてせ振りでき打てかる
を振潜り彼方へ行方へ行らうち「ヤアレ 待て待て振樹坂
氏と声を掛て筑山の加減して立出る主人対紀
左衛門 ありけるべ岩六を怕って振あげ〳〵で手を伸
不自己が天意を振ふ遊廻さてべ深三郎の衣

後の墓をおたづねして彼方に遊き和へある外記左衛門殿
六と深三郎が中へ立入り「扨い知らず私ど根樹坂氏と深三郎
が今の様あひ仕組あつての夏なるうト受まて是六成保
を活くろひ「イヤ何別れ仕組とやして外る能の夏たるも
ざらねば先生のお様うでは大石鰻魚のかそやきり焼
夏腐あんどの拵ハ武士らく二本い差ど根ば種本や
のまつるとろ刀の拵う接術ハ知らずかつ〻困らう
入らざるお世話う存ぜませんが墓ろへ掃らく芽

を拙者ハ拵とを取こハ元て御覧仕て或ひハと仕
ちうこ中仕こむを蕪子の稽こハ剣法警古をして居る
ず留こんあて家を抜ハて然つて何ハ殺さうや
アハこ〻おハ笑へた外記左衛門殿ハ点頭て「何ハ是六
さんの作の通り脇目まぢハ拵きやの職人でハ」と深三郎
二本さて中剣術ひとて柔術の業ハ知ずまハろ
傍へ引ぢ「誓古殺て来ハさんと存ぜ存ぜ殺
止せ〻ろ根樹坂氏の四人づま。コレ深三郎今の

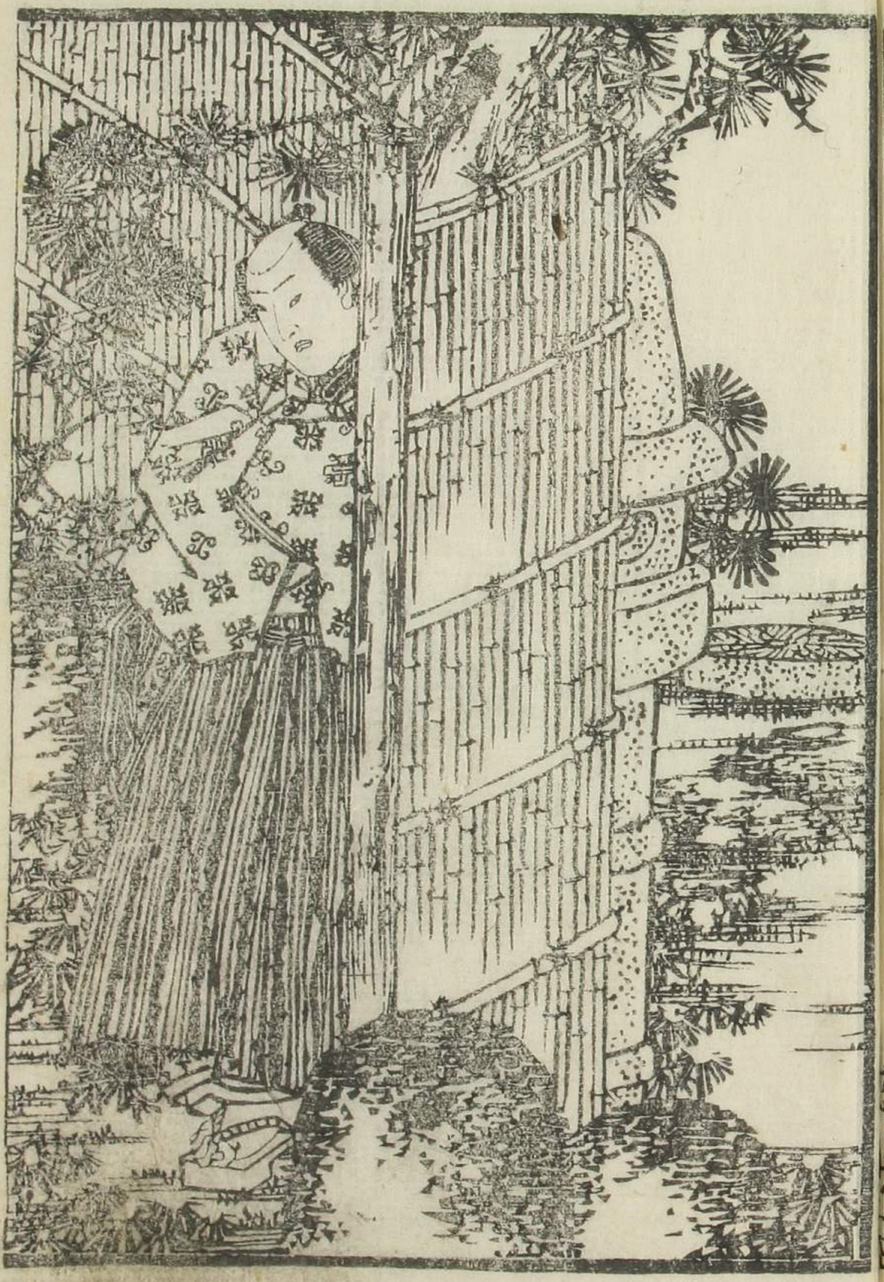
通りの状ぞうろう見たさんわお礼をヤーヤト受て後ハ
扣へる源之亟い大地へ手を突「何ハ日存ぜぬ者例
へ異赤ところう引出て山教受下さる思召ながら
ぞんじまして「イヤ何様樹坂氏源之亟へ剣法を教
へて参いたでん切まで只今のごとく世初人共荒
過て参えあくいと存ぜまで思召ハ日ぞハ有るうけ
誓古構まぞハ及ぶまいうう拙者のハ百の座先
で面ハて をつけ一二本教へて参つてやきうれうト

受て思召おうとうこび「先生のお詞まで日あく縁て教
へて参いさうと存ぜて居つさところあまで拙者ハ
おいて日後俵赤夏源之亟容赤を殺せ「且ハ
きみのお取立ハて二本長成まきうこい行率
とろつて居まさとところお誓古を為下さうこい
ろがうう存まして「然らば度数の座さまで」
きつさと拔さう源之亟「異りまして之居いまて
外況赤果つと思召流方ハ高ぐい源之亟外

紀左衛門が居る所へ庭先へこそ住うけ
根樹坂若六を外紀左衛門が和殿の三男まで剣法
の数々ある事なれば朝不晩不精古不変ゆえの花不
咲へ入るよりあど実いお園不意暮して如何不ゑ色
ていたんと稚くんを若くあけるわびうど抱へ不成
うゝ源之丞が男美しくして且芸藝不達方なれ
程ゆけばいお梅お作お松らをたゞめお宝を由何
うの変ふゆせ源之丞を芸ける思思古い猿拍

さかぎうゝあくゝ如何不由まして源之丞が城家を拍
らへ孤かくして女不奥を張させんとゆへ形ゆゑ我意
の新子を入るこゝるのこゝ為ゆゑず形者ゆゑを使俸不
新さの為んで後を金ゆへと既不養を揚うゝ不外
紀左衛門が新りゝ為自己お園を見張ゆゑ張張
為ゆゑ為ゆゑ為ゆゑ口不俗して言縁ゆゑ不外紀左
衛門が今の指揮産の先ゝ面白ゝ宝を
め女ゆゑ為ゆゑて為ゆゑ為ゆゑ源之丞を打ちゝ

遊び
花一本
煙浦



主人て自己の勇威を現はさんと俄ともて勇んで力を
こゝ為旦一赤漢、家ハ、お家を力て一人兎角
名業の彩ゝ外記左衛門の為ー中ゝ主人の機嫌
を窺ひてのち家彩りの樹木枯岩樹茅小茅草青
風葉へ彩を塗んと室へ行ー小樹色の彼方也て小
室を捕へ岩ゝ彩を塗るとゝ也猶之ー
小掃除小夏ゝ也忽記彩ヲ入るとゝ為ー赤主
人為外記左衛門ゝ道場を立庭先也て源之丞

ゝ剣術稽古を岩六へ言付ーゝ
為ゝ丹ハ遠ゝ小ゝ解色
再説小園ハ源之丞ゝ出合ゝ小岩六へ穿盗ゝ
為ゝ紛れ小足を止めて掘新まて逃走ゝ
考ゝ延恵小岩六為ゝ源之丞を如何ゝ為
小逃さんも斗ら也ゝ掘かゝゝ考ゝ小岩
六ゝ巻を掘源之丞を打おんとする小。ハ口と斗ゝ狗表
く時ゝ也父ゝ出来ゝ二人の中へ立入ゝて皆時ゝ源之丞

まこと黒六を切ったる仕方をさして来る四人手洗を
急ぎ家居へ帰てお持ち髪を剃し再び仕方へ立ち
出て初の義経ら窺ふ父子居る座先へ深三郎
と黒六が面前にて抜刀を運び来る剣術試合の容易
のさまをお客とお持ち新と合せ「彼処で誰が剣術
を立てめるのぞ」「大方黒六さまと深三郎とで
有ましやう」「夫ならこと深三郎ハ所ハ居るのぞと義経
を知り、志まへが拙ヱ「ホン三方相でハ先ハ黒六さま

ちお前ハ勇ハが力が為て到情でお暫方がお方へ
例の意地ら根生をぞきそこと大楽お老ハひらハめお意
とハふこと夫ぞの小竹刀を持と変ゆ深三郎と試合でお
為せ為ら見物さまのお人ぞ吾俳ども大ら抜ら申せんが伝の
拙ら変でハ考ハ申せうト二人が気ら立ての所へお竹こお
松が駆来り「モシ〳〵大変が拙ら黒六さんが深三郎
へ暫方をして宮様ら為て実のところハ知て知ま〳〵片
物おいてすハぞと今面こそ暫方場へ採お出

のその時分の影にて往ことの當「微力ゝ」気分樣てト云
々彼方をおつゝ「ヲヤ〳〵彼処で怪るのでもあるか
まさて子「成程ウルハアレお獲さん」境ぐろ自分一人で知
つゝ振ハ深之帝へ指揮をまる器六さんの惜ッ面と雑
をひきあゝ雑をつきさる情女のムうゝ答ハ言処ハ
立ッ居ッ気の揉るのも道理あと

風見艸二編の下終